

上海レポート

令和5年2月号

Vol. 30



公益財団法人 大阪産業局上海代表処 (大阪府上海事務所)

中国上海市延安西路 2201 上海国際貿易中心 408室 200336 Email osaka@ibo-sh.com.cn
TEL 86-21-6270-1901 FAX 86-21-6270-1351 http://osaka-sh.com.cn

20230206 号	手探りの日中往来手続き	副所長 小森亮人
20230213 号	「元宵節」ランタンと湯圓(タンユエン)でお祝い	秘書 孫芸
20230220 号	週末小旅行	所長 南浦秀史
20230227 号	中国 SF スペクタクル	副所長 小森亮人

手探りの日中往来手続き

昨年 12 月に中国におけるゼロコロナ政策は大きな変更を迎えました。昨年上海に赴任した際は一時帰国は当面難しいものと思っていましたが、今回の政策変更により現地春節休暇を利用して日本に帰ることができました。帰国時の体験を基に日中往来の現状についてお伝えします。

・入国時 中国から日本を訪問する場合、所定の検査証明書が発行可能な医療機関で出発 72 時間以内に PCR 検査を受ける必要があります。チェックインの際に検査証明書の提示を求められましたが他に特別な手続きはなく、出国審査を経て搭乗し、約 4 時間後成田空港に着陸しました。

到着後も抗原検査用の部屋に案内され唾液採取を行います。結果が判明するまで待機用のスペースで過ごすのですが、焦っても仕方がないと頭では理解できるものの、自分はずっと結果が告げられず、時間が経つにつれ不安が募ってしまいました。結局 50 分程経過後に陰性と判明し入国審査に進むことができました。着陸から到着ゲートを出るまで、約 2 時間程度でした。

・出国時 中国入国時も出発 48 時間以内に PCR 検査を受け陰性証明書を発行してもらう必要があります。様式は特に指定はなく帰国前と比べ手配は容易でした。日本出発時にはカウンターで陰性証明書を提示しますが、他に特別な手続きはありません。昨年の上海赴任時には 2 度の PCR 検査や必要書類のアップロードなど煩雑な手続きを踏んだことを思えば、急激にコロナへの対応が変化したことを改めて感じます。中国到着後も、赴任時は入国審査後専用の通路を通過して隔離用のホテルに誘導されましたが、今回は何事もなく到着ゲートから出ることができました。

以上が私の一時帰国における出入国の手続きです。以前と比べ出入国に要する心理的、時間的な負担が大きく軽減されたことは間違いありません。駐在員としては、一日も早くコロナ前のように人と人との往来がスムーズに行える日が来ることを期待しています。



「元宵節」 ランタンと湯圓(タンユエン)でお祝い

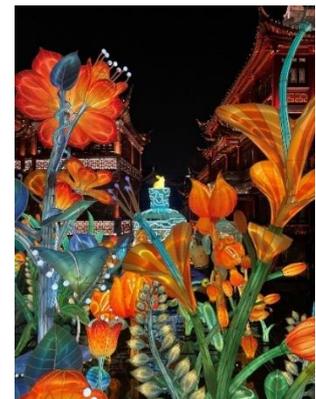
3年間に及んだゼロコロナ政策がやっと終了しました。今年にはいて、状況は落ちつき、生活はほぼ正常化しました。

2月5日(日曜日)は春節(旧正月)を締めくくる「元宵節」です。上海で最も人気を集めているこのお祭り行事は歴史的ランドマークである豫園(よえん)で行うランタンフェスティバルです。国内の多くの観光客で賑わいました。道や商店街などは灯籠、提灯で溢れています。人々は灯籠を見物し、字謎遊びを解き、子供たちは皆手に色鮮やかな灯籠を持って遊んでいます。また、普段は見られない龍踊りや獅子舞の芸能も楽しめます。

元宵節に提灯を飾るほかにも、「元宵(ユエンシャオ)」と「湯圓(タンユエン)」といったもち米団子のような伝統スイーツを食べしてお祝います。「元宵」は中国の北方での呼び方で、南方の人々は「湯圓」(タンユエン)と呼びます。上海で生まれ育った「上海っ子」は、元宵節に食べる湯圓(もち米粉で餡を包み茹でた団子)を食べないことには春節が終わらないと考えている人が少なくありません。

元宵節が近づくにつれて、上海では、湯圓(タンユエン)の売り上げが日増しに伸びていました。そして冷凍の湯圓を購入したり、店で食べたりするよりも、手作りの出来立ての湯圓を買い求める方が上海っ子にとっては重要なため、たとえ1~2時間の長蛇の列に並ぶことになったとしても、その購入したいという気持ちには影響しないようです。

やはり元宵節で印象深いものは灯籠や提灯の幻想的な様子と湯圓を食べることです。多くの人々にとって元宵節は特別な思いが詰まった素晴らしい祭りであり、新年の抱負を掲げたり、お祈りを捧げたりもします。このような祭りは、多くの人々にとって新年を迎えるための素晴らしいスタートとなります。



週末小旅行

先日、上海市に隣接する江蘇省蘇州市に出張した際、今更ですが、この2年間の新幹線駅の緊張感がまったくなくなっていたことに驚き、改めてコロナ規制が緩和されたことを実感しました。そこで、これまでなんやかんやと手続きが煩雑だったので行く気が起らなかった上海市外への週末小旅行に、これからどんどん出かけて見聞を広めようと思います。

最初の行き先に選んだのは、上海市の東南に位置する浙江省杭州市です。杭州は世界遺産の西湖が有名ですが、まずは六和塔に行くことにしました。虹橋駅から新幹線で小一時間、料金は2等車で73元(約1400円)です。杭州東駅から地下鉄4号線に乗り換えて、約30分、水澄橋駅で降りてそこから徒歩約20分で着きます。

六和塔の前は秋の大逆流が有名な銭塘江という河が流れています。塔はこの河のすぐそばに建っていて、昔は灯台の役割も果たしたそうです。今の塔は1152年に建てられたもので、外観は13層ですが中は7階建てになっていて、上まで登ることができます。

この六和塔は、中国4大奇書のひとつ、「水滸伝」のなかで、登場人物のひとり「花和尚魯智深」が大逆流の潮の音を聞いて悟りを開き、あの世に旅立つ舞台として登場します。魯智深は、義に厚い破戒僧で日本人にも人気があり、江戸時代には浮世絵で描かれたり、その性格から刺青の図柄になったりしているようです。

水滸伝ファンの方は、上海から日帰りで行くことができますので、聖地巡礼に是非一度訪れてみることをお勧めします。魯智深と武松があなたを待っています！



中国 SF スペクタクル

宇宙を舞台にした SF スペクタクル映画といえばハリウッドの十八番というのが定説ですが、2019 年に公開された中国産 SF 映画「流浪地球」は国内で爆発的なヒットを記録、アメリカをはじめ海外でも上映されました。現在その続編にあたる「流浪地球 2」が公開されており、前作を上回るスケールから大きな反響を呼んでいます。中国人の友人も本作のファンの一人で、彼の誘いで先日市内の映画館にて鑑賞しました。

拙い中国語しかできない自分が映画鑑賞なんて大丈夫かと上映前は不安でしたが、中国では国内に多くの方言が存在する関係から殆どの映画に中国語字幕が付けられており、本作のような大規模な作品ではそこに英語字幕も併記されるので、ある程度の内容を把握することができました。とはいえ早口になる場面では字幕に頼り切るのは難しく、上映後に友人から細部をフォローしてもらっての鑑賞体験となりました。

ストーリーは近未来の世界を舞台に、ある地球規模の危機に対する壮大な計画が世界各国の思惑を交えながら展開されるというもので、ハリウッド映画とは一味違った角度からの世界観を楽しめます。作中の SF 描写は CG、実写とも非常に力が入っており、迫力ある宇宙空間のシーンから衣服の細部まで、作り込まれた映像を楽しむことができます。物語の中には AI や情報化社会など現代中国でも身近に浸透している要素が散りばめられ、SF でありながら時折現実社会を見つめ返させるような表現がなされているのも印象的でした。

この映画は本作では完結しておらず、2027 年公開を目指した続編の製作が発表されています。前作は日本では一部の映画祭での上映に留まりましたが、本作のような作品が日本でも公開されることを期待したいと思います。

